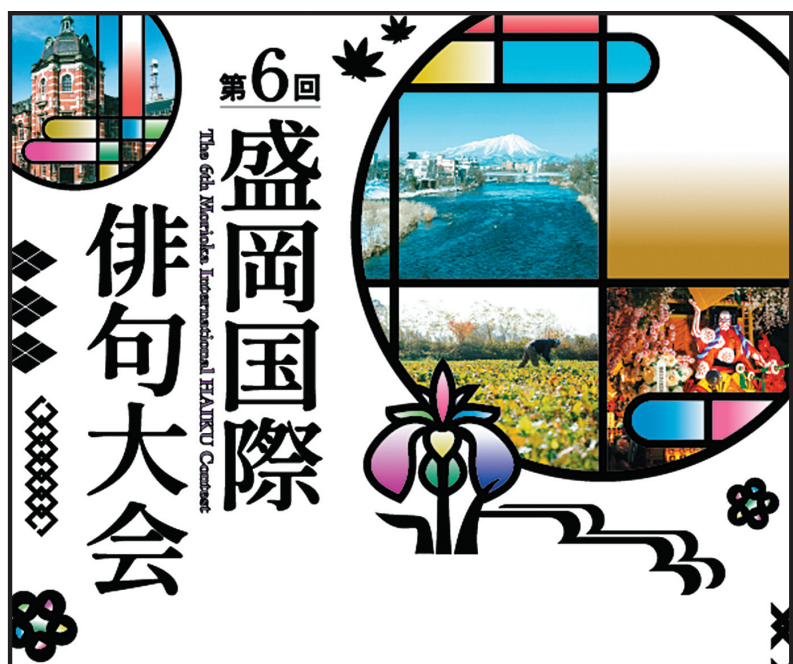




第六回盛岡国際俳句大会

令和六年十一月十六日（土）

盛岡劇場

入選作品集



盛岡国際俳句大会とは

日本文化を象徴する芸術である俳句は、今では「HAIKU」と呼ばれ、世界各地で親しまれていることをご存知ですか。

盛岡国際俳句大会は二〇一九年の盛岡市市制施行一三〇周年を記念して始まった日本語と英語による俳句の大会です。

盛岡市は山に囲まれた風情ある街並みの中を、鮭が上る川が流れる、自然豊かで四季の彩りを感じられる街です。また、多くの偉大な先人を輩出した歴史と文化が薫る街でもあります。

そして俳句は、そうした自然や歴史を切り取り、五七五のたった十七文字で表現する最も身近な芸術なのです。

盛岡に住む人が、自分の街を見つめ直し、その魅力を再発見したり、盛岡を訪れた人が、その魅力を知り、好きになってくれたり。

この大会がそんなきっかけになってくれれば幸いです。



ごあいさつ
盛岡国際俳句大会実行委員会
会長 内館 茂

盛岡市は、四季の移ろいを身近に感じられるまちであり、また、俳人山口青邨をはじめ、石川啄木や新渡戸稲造など、文学に造詣の深い先人が残した歴史文化が息づくまちであります。

盛岡国際俳句大会は、日本語と英語による俳句大会で、俳句を通して盛岡の魅力を再発見し、国内外に発信することを目指して二〇一九年から始まりました。第六回となる今大会も、海外を含め、大変多くの方々から投句をいただいたところで、盛岡、そして俳句を愛する皆様の想いと、選者の先生方をはじめとする大会関係者各位のお力添えの賜物であり、皆様に深く感謝を申し上げます。

この大会をきっかけとし、盛岡市民の皆様には、自分の住むちに誇りを持ち愛着を深めていただくとともに、国内外の皆様には、盛岡の魅力をより一層知っていただくきっかけとなりますよう御期待申し上げます。さらには、俳句を通じて多くの皆様が、盛岡の魅力に心惹かれ、共感する「盛岡ファン」になっていただければ幸いです。

結びに、投句いただいた皆様をはじめ、関係各位の今後ますますの御発展を祈念いたしまして、挨拶いたします。

第六回盛岡国際俳句大会 投句規定

投句募集期間 令和六年五月二十日～八月三十一日

❖日本語部門

【一般の部 自由題（自由題材の四季の句）】

選者 高野ムツオ（「小熊座」主宰）

夏井いつき（俳句集団「いつき組」組長）

岸本尚毅（「天為」「秀」同人）

賞 大会賞一作品、選者賞二作品、特選六作品、

入選六十作品

【一般の部 盛岡題（盛岡にちなんだ四季の句）】

選者 名久井清流（「草笛」代表）

白濱一羊（「樹氷」主宰）

賞 大会賞一作品、盛岡市長賞一作品、

特選四作品、入選二十作品

【ジュニアの部】

選者 白濱一羊（「樹氷」主宰）

及川真梨子（「小熊座」編集長）

賞 大会賞一作品、文京区長賞一作品、入選十作品

❖英語部門

選者 マイケル・ディラン・ウェルチ（俳人）

木村聡雄（俳人 国際俳句協会事務局長）

賞 大会賞一作品、特選五作品、入選十二作品

※ 漢字は新字体で統一しています。

【日本語部門】

◇大会賞

自由題 夏井いつき 選

早苗饗や打ちて鳴るものみな楽器 長野県 穂苅真泉

【講評】 田の神に感謝し、田植えに携わった人々を饗応する。食べて酔えば唄も出よう。手拍子もまた楽器の一つ。喜びに沸く「早苗饗」だ。

盛岡題 名久井清流 選

石割桜シテの翁のごとく佇つ 盛岡市 伊藤恵美

【講評】 シテは能または狂言の主役のこと。一読、朧月夜の下、石割桜が翁となって舞う幽玄な姿が見えてくる。見事な比喩の句である。

ジュニアの部 白濱一羊 選

瓶の中わたしをのぞくラムネ玉 盛岡市 黒川華蓮

【講評】 ラムネ玉をのぞきこんだら、自分の顔が映っていることに気づいたという句意だろう。それを逆転させて表現した工夫が素晴らしい。

【日本語部門】

◇大会特別賞

盛岡市長賞 白濱一羊 選

盛岡に磐座あまた鳥渡る

盛岡市 村井康典

【講評】磐座とは神の依り代となる岩。鬼の手形で知られる三ツ石、桜山神社の烏帽岩など、盛岡には多い。そのはるか上を渡り鳥が北へ帰る。

文京区長賞 及川真梨子 選

夏の雨やま大国の歌みたい

東京都 神野純

【講評】梅雨でもタ立でもない、夏のさっぱりとした雨の音が古代の歌のように聞こえました。どんな歌か誰も知らず、想像が広がります。

【日本語部門】

◇選者賞

自由題 高野ムツオ 選

白地図にイーハトーヴの夜長かな

矢巾町

片山千恵子

【講評】 おそらくは岩手県の輪郭のみの白地図。そこに夜長の許す限り、自分だけのイーハトーヴを色鉛筆で描き出す。豊かな想像力が満ちる。

自由題 岸本尚毅 選

新涼や仔牛の角の大豆ほど

花巻市

上野節子

【講評】 「豆ほど」ではなく「大豆ほど」とまでいったことで、豆粒ほどの、大豆のような色合いが想像される。新涼の気分も感じられる。

日本語部門

◆一般の部 自由題

特選

高野ムツオ 選

誰ひとり救へぬ両手菜を洗ふ

花巻市

熊の谷のまさる

特選

高野ムツオ 選

平等に生まるるひかり石鯨玉

盛岡市

すずめ豆

特選

夏井いつき 選

黙禱や汗のゴム手を引き剥がす

奥州市

郡司山吹

特選

夏井いつき 選

海開き宮司の足を波洗ふ

愛知県

小河旬文

特選

岸本尚毅 選

野分して石炭こぼす五平太舟

神奈川県

村田朋美

特選

岸本尚毅 選

肺病みてひさしの先の清和かな

奥州市

高橋瞳

◆一般の部 盛岡題

特選

名久井清流 選

「じゃじゃ麺でしたね」と月夜の運転手

釜石市

佐藤茂之

特選

名久井清流 選

つばくらめ開運橋をひるがへる

奥州市

郡司山吹

特選

白濱一羊 選

なんたらと祖母立ち上がる日向ぼこ

盛岡市

工藤幸子

特選

白濱一羊 選

盛岡の石に顔ある野分かな

長野県

杏乃みずな

日本語部門

◆一般の部 自由題

入選

高野ムツオ 選

総入れ歯外しひとりの敗戦忌

千葉県 長尾登

閉校式校庭の隅の残雪

一戸町 浅羽美和

全天を見開きにして賢治祭

千葉県 長尾登

甘過ぎる故郷の菓子秋燕

釜石市 風ゆい

海霧深し大陸棚に続く坂

久慈市 柳幸子

死後は人魚海老の甲羅を取っておく
京都府 河本高秀

ばら園にばらの天井原爆忌

千葉県 千葉信子

秋思あり王には王の火には火の
盛岡市 戸舘大路

七月の夕日水面に触れんとす

石川県 秋野しら露

故郷は基地の島なり月上る
沖縄県 上江洲一石

日本のチベットにをり夏休

釜石市 佐藤茂之

八つ折りのダイヤグラムや秋燕
秋田県 おでめ

氷柱の解けて現の水たまり

新潟県 伊藤一二三

野葡萄を揺らし一両電車かな
秋田県 加瀬谷敏子

ネジ一本余る蛙の目借時

東京都 多数野麻仁男

花の下生命線は皺の中
大阪府 岩田真弓

ムツクリや文字なき墓の実玫瑰

宮城県 石川喜美子

雪しんしん休校の日の給食室
宮城県 木村菜智

竜天に私は三陸鉄道に

遠野市 伊藤辰弥

荒海を渡る卒業証書かな
盛岡市 及川永心

日本語部門

◆一般の部 自由題
入選

夏井いつき 選

テノールもバリトンも無き社歌を蜂

滋賀県

蜘蛛野澄香

野分だつ神杉ひようひようと昂る

福島県

佐藤儒良

枯山へ牛追唄の波の群

盛岡市

梅津登志秋

保育園決まらぬ帰路の山の藤

一戸町

浅羽美和

前傾の木椅子八月十五日

東京都

鈴木綾子

秋思あり王には王の火には火の

盛岡市

戸舘大路

鬼百合も己も向いた方が前

愛媛県

穂積洋子

灯火親し実物大の象の爪

北上市

小林史枝

妻と行く開運橋やお元日

釜石市

佐藤茂之

乳ねだる仔馬小走り馬祭

盛岡市

畑育子

みちのくの春よまだ祈れないごめん

盛岡市

みつ豆

すぐ笑ふ女加わり菊の市

久慈市

米内幸子

漢方と干し鰯匂ふ裏通り

香港

陽光樹

喪服着て明日の朝のバナナ買ふ

奥州市

村上真理子

曲がり屋に甘干馬の目は青し

秋田県

赤尾てるく

先生のかかるとにタトゥー休暇明

東京都

くま鶉

誰ひとり救へぬ両手菜を洗ふ

花巻市

熊の谷のまさる

大蚯蚓這ふや乾びし蚯蚓の上

東京都

くま鶉

じやがいもの花山すその小学校

盛岡市

佐藤ひこあき

雪しんしん休校の日の給食室

宮城県

木村菜智

◆一般の部 自由題
入選

岸本尚毅 選

遠足や線路つづくと歌ふ子ら

福島県 佐々木さおり

線状によぎる熊本御精霊雨

神奈川県 村田朋美

ばら園にばらの天井原爆忌

千葉県 千葉信子

蝸や迎え待つ間の保健室

一戸町 浅羽美和

溶岩原や溶岩から溶岩へ四十雀

愛知県 山本洋子

ナマハゲを睨み返す児仁王立ち

秋田県 小林文六

星老いて山椒魚の大あくび

盛岡市 十月小萩

おぼんですと言ひさうな口山吟

盛岡市 五日市明子

わが影のやや曲がりたり温め酒

盛岡市 村田素有

榎梓の干からびるまで父の部屋

秋田県 小林さおきち

送り火の炎のゆらぎ消ゆるまで

盛岡市 太田加留子

喪服着て明日の朝のバナナ買ふ

奥州市 村上真理子

啄木忌ばら銭で買ふ缶コーヒ―

東京都 佐藤ひろみ

入道雲滝のごとくに崩れけり

宮城県 渋谷史恵

早苗饗や打ちて鳴るものみな楽器

長野県 穂苅真泉

大蚯蚓這ふや乾びし蚯蚓の上

東京都 くま鶉

散策の皇女のやうな夏帽子

愛媛県 越智空子

夕映えや星くらふ雲消えて秋

東京都 桂葉子

ごみ袋からし九月の朝を風

愛媛県 越智空子

サルビアを吸ふ今わたし虫になる

盛岡市 十月小萩

日本語部門

◆一般の部 盛岡題
入選

名久井清流 選

身体中太鼓にさせる夏祭

神奈川県 杉山太郎

雪小止みおぼんでがんすとはやさし 福島県 鶴小なみ

地図を手の子等へ城下の風薫る 八幡平市 佐々木一夫

賑やかに日焼けの子らのわんこそば 東京都 羽住博之

南部煎餅焼くる匂ひや街薄暑 盛岡市 伊藤恵美

雉子啼く三川ここに集まりて 盛岡市 阿部ゆき子

バンカラの下駄鳴らし行く朝桜 遠野市 森のくま子

なはんてふ言葉やはらか日脚伸ぶ 盛岡市 太田加留子

ここに住む決め手は春の岩手山 盛岡市 大崎ゆみ子

睫毛凍る神子田朝市のひつつみ汁 一関市 木村久草

日本語部門

◆一般の部 盛岡題
入選

白濱一羊 選

啄木忌他郷の砂に腹這ひて

大阪府 今井文雄

てのひらに石割桜の花の遺書

東京都 曾根新五郎

お花見にひよいと出て来るあんバター

奥州市 主馬

神子田市釣りは要らぬとパナマ帽

二戸市 肖草

南部煎餅焼くる匂ひや街薄暑

盛岡市 伊藤恵美

なはんてふ言葉やはらか日脚伸ぶ

盛岡市 太田加留子

啄木の新婚の家あきつ飛ぶ

奥州市 遠藤カオル

東京のネオンみちのくの凍星

矢巾町 橋本椿紗

青信号一気に渡るめ組山車

盛岡市 相馬定子

目薬の冷たき重さ啄木忌

愛媛県 小野更紗

日本語部門

◆ジュニアの部

入選

白濱一羊 選

五月雨やクラリネットの管湿る

福岡県

篠原由

梅雨寒しひそひそ歩くかたつわり

福岡県

長谷川真絆

君と飲むコーラは冷えて夏来る

福岡県

李詩音

いわし雲はがれるうろこが燃えていた

岩手町

山本心十葉

せつぶんでおにの金ぼうふらないで

盛岡市

林崎陽

入選

及川真梨子 選

君と来て螢と歩く夜のあり

福岡県

大海稀稟

パレットの乾いた絵具夏の風

盛岡市

ぬまたはるき

さっこのそのかけ声でみな一つ

盛岡市

田口実千花

いわし雲はがれるうろこが燃えていた

岩手町

山本心十葉

「花火の音がする」二階へ上がる

盛岡市

三浦愛

文京区と盛岡市の絆

歌人、詩人、評論家として知られる石川啄木は、岩手県盛岡市日戸で生誕し、文京区小石川の地においてわずか26歳の若さで亡くなりました。この縁から、2019年2月20日両都市は永続的な交流が図られることを願い、友好都市提携しました。

これまでの交流

▶ 友好都市提携調印式



石川啄木のご親族立会のもと、両市区長や議長など約100名の出席者が集まり、調印式が行われました。

▶ 啄木学級 文の京講座



盛岡市と玉山村の合併（H18.1）を機に、文京区において「文の京講座」を開催し、文京区民をはじめ、首都圏の方々に広く石川啄木の魅力を発信しています。

▶ 盛岡さんさ踊り



文京区民が来盛し、盛岡さんさ踊りに参加したり、「文京さくらまつり」でミスさんさが「踊りを披露するなど、地域文化を通じた交流を行っています。

▶ 俳句交流会



友好都市提携5周年を記念し、文京区と盛岡市の中学生が盛岡のまちを歩き、俳句作りを通して交流を行いました。

【英語部門】

Judges : Michael Dylan Welch, Toshio Kimura

Japanese Translation : Toshio Kimura

選者 : マイケル・ディラン・ウェルチ、木村聡雄

邦訳 : 木村聡雄

【Grand Prize】 ビクトリア市長賞

マイケル・ディラン・ウェルチ選
—Michael Dylan Welch

Sam Renda 南アフリカ

mayfly wings
his talk of death turns
matter-of-fact

カゲロウの羽
彼の語る死は
淡々と

The poet Mary Oliver once wrote, “The end of life has its own nature, also worth our attention. I don’t say this without reckoning in the sorrow, the worry, the many diminishments. But surely it is then that a person’s character shines or glooms.” That seems to be the case with this poem, confronting death directly, even if after a possible time of avoidance or wistfulness. The juxtaposition of this practicality with the ephemerality of a mayfly’s wings deepens the realization that even human life is ephemeral. As with the mayfly, to everything there is a season, and we are reminded of the seasonal progressions of human life. This is a poem of acceptance.

—Michael Dylan Welch

詩人のメアリー・オリヴァーはかつてこう書いています。「人生の終わりはそれ自体特別であり注目すべきものです。私は、悲しみや心労、さまざまな衰えを考えずにこんなことを言うつもりはありません。けれどもその時こそ、その人格が輝き、あるいは陰ることは確かです。」この句がまさにその通りで、たとえ切なく感じる時があったとしても死と直接向き合っています。現実とカゲロウの羽の儚さとの並置は、人間の命は儚いものという認識を深めてくれます。カゲロウがそうであるように、何事にも季節があり、私たちは人生の季節になぞらえた歩みを思い起こすのです。これは受け入れようとする句です。

—マイケル・ディラン・ウェルチ

Reneu do Amaral Berni ブラジル

at the small waterfall
like owners of the world
the boy and his dog

小さな滝
世界を手にしたように
少年と犬

This haiku is joyful. Nothing is like the wonder of childhood, and this poem captures its delight and focus marvelously. Here by the waterfall, the boy and his dog are the owners of the world. That it's a small waterfall deepens the wonder, for even something small provides all the amazement that this boy needs. Environmentalist Rachel Carson has written that she wishes for each child in the world to have "a sense of wonder so indestructible that it would last throughout life, as an unfailing antidote against the boredom and disenchantments of later years, the sterile preoccupation with things that are artificial." This poem reminds us of that wonder and challenges us to find it again.

この俳句は喜びに満ちています。子供時代の驚きは他とは比べられないもので、この句はその喜びとその中心を見事に捉えています。この滝のそばで、少年とその犬こそが世界を手にしたのです。それが小さな滝であることも驚きを深めてくれます。というのも、たとえ小さいものであってもこの少年が求めている驚きを与えてくれるからです。環境保護活動家のレイチェル・カーソンは書いています。世界中の子供たち一人一人が「不滅の驚きの感覚を持つように、そしてそれが、のちの人生での退屈さや幻滅、人工的なものへの不毛な偏見に対する揺るぎない解毒剤として生涯を通じて続くように、願っています。」この詩は、私たちにそんな驚きを思い出させ、再びそれを見出すよう挑みかけているのです。

山田 由紀子 日本

a local bus
with no passengers...
autumn sunset

ローカルバス
乗客もなく
秋の夕暮れ

The seasonal reference here suggests melancholy, especially when paired with the seemingly sad image of an empty bus. It's a local bus, too, making the poem intimate and humble—no grand travel possibilities here. The observer sees this image from an unspecified vantage point, but if we put ourselves in the viewer's shoes, we too can feel sadness. We may empathize with the bus driver, for having to work even with no passengers, or maybe we feel grateful that the bus is there to serve town residents even when it's not always needed. The sunset completes the image, with the endingness of autumn echoing the end of the day, the end of that day's need to travel.

空っぽのバスという見るからに悲しげなイメージと組み合わせられて、この句の季節に関する言葉は憂鬱さを暗示しています。また、地元のバスということで、壮大な旅の可能性もなく、この句を親しみのある素朴なものとしています。観察者は不特定多数の視点からこの様子を見ていますが、私たちもその側に立てば悲しさを感じることができるでしょう。乗客がいなくても働かなければならないバスの運転手に共感するかもしれないし、常に必要でなくても町の住民のためにバスがあることに感謝するかもしれません。夕日がこうしたイメージを完成させ、秋の終わりがその日の終わりやその日に必要だった旅の終わりと響き合っています。

Nina Kovacic クロアチア

open window
scent of rose from darkness
delays my dream

窓開けて
闇より薔薇の香
遅れて夢

The poet says that when the window was left open on a summer night to cool off, he/she could smell the roses on the night breeze. "Delays my dream" is an interesting expression. The poet may have been trying to drift off to sleep. Did the sweet smell wake him/her up and delay the start of dreaming? If it was because the poet was intoxicated by the smell of roses, that would be lovely, too.

夏の夜に涼をとろうと窓を開けておくと、夜風に乗って薔薇の香りがしてきたというのです。「遅れて夢」"delays my dream"は面白い表現です。うとうとと眠りに入ろうとしていたのかもしれませんが。甘い香りに目が覚めて、夢見のはじまりが遅れたのでしょうか。薔薇の香りに酔いしれたためなら、それもまた素敵なことでしょう。

深谷 健 日本

cherry blossoms fall...
magician is still
looking for the card

桜散る...
手品師なおも
札を探す

When the cherry blossoms are falling, our mind may become restless, wondering if this could be the last time to see them this year. The cherry blossoms fall quickly, but this magician seems to be taking longer, rather than instantly spotting the card and receiving a round of applause. The people watching the magic trick are flustered and restless. Such a juxtaposition of cherry blossoms with a magician seems to be fresh and even funny.

桜の散るころは、今年もこれで見納めかと心も落ち着かなくなります。桜はすぐに散ってしまうのに、この手品師は即座にカードを見抜いて喝采を浴びるところか、まだ時間がかかっているようです。手品を見ている人たちははらはらして落ち着きません。そうした桜と手品師の取り合わせは新鮮で、滑稽さも感じられます。

Saumya Bansal インド

window pane
her finger traces
the path of a bee

窓ガラス
指がなぞる
蜂の跡

As a child I (the judge) once wondered about a bee that had burrowed into a tulip flower in search of nectar, and I blocked the flower with my hand. The result was...that I was stung and cried a lot. In this haiku, too, the poet's curiosity about the bee outweighed the fear of getting stung, and he/she followed the bee flying just outside the window with her finger. The only big difference from my time is that there is a "window pane" between the poet and the bee.

幼いころ私（選評者）は、チューリップの花に蜜を求めてもぐって行った蜂を不思議に思い、花を手でふさいだことがありました。結果は…刺されて大泣きでした。この作品でも、刺されたら大変という心配より蜂への好奇心が勝って、窓のすぐ外を飛ぶ蜂を指で辿っています。ただ、蜂との間に「窓ガラス」があるとところが私のときとは大きな違いです。

【Honourable Mentions】入選

マイケル・ディラン・ウェルチ 選

—Michael Dylan Welch

Kat Lehmann アメリカ合衆国

morning moon

each stone on this beach

the perfect size

朝の月

この浜の石どれも

完璧な大きさ

Julie Anne Bates ニュージーランド

winter sun

old chair

the shape of sadness

冬の太陽

古い椅子

悲しい形に

Boris Nazansky クロアチア

puddle in the park

one yellow leaf returned

to the treetop

公園の水たまり

一枚の黄色い葉

梢へと

Ed Bremson アメリカ合衆国

the silence

of the birds,

Gaza dawn

鳥の声の

沈黙

ガザの夜明け

Gregory Piko オーストラリア

dinner for two

the stars in the sky

grow brighter

二人の夕食

空の星々

さらに輝く

Shloka Shankar インド

wild aster

the letter I never

wrote

野に咲くシオン

書かなかった

手紙

【Honourable Mentions】入選

木村聡雄 選

—Toshio Kimura

吉田 悠斗 日本

butterfly

I almost forgot

spring twilight

蝶よ

わたしが忘れていた

春の黄昏

Maria Tosti イタリア

armistice –

lotus flowers open

toward the sky

停戦や

蓮の花

空へと開く

Fillhardt, Hartmut ドイツ

on the bar counter

next to the empty glass

a vase

バーカウンター

空のグラスの隣に

花瓶

Cristian Matei ルーマニア

lullaby –

the baby's hand toward

the cherry branch

子守歌—

赤ちゃんの手

桜の枝へ

Nikola Đuretić クロアチア

Sunny summer morn –

perhaps

no doubts today.

夏の朝晴れて—

おそらく

今日こそは

Khoa Ngo Binh Anh ベトナム

grandfather's gravestone

the weight of raindrops

bends the grass

祖父の墓碑

雨粒重く

たわむ草

主 催 盛岡国際俳句大会実行委員会
共 催 盛岡市 IBC 岩手放送
後 援 岩手県 盛岡市教育委員会 公益財団法人盛岡市文化振興事業団
公益財団法人盛岡国際交流協会 一般社団法人現代俳句協会
公益社団法人俳人協会 国際俳句協会 公益社団法人日本伝統俳句協会
俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会
岩手日報社 NHK盛岡放送局 テレビ岩手 めんこいテレビ
岩手朝日テレビ エフエム岩手 岩手ケーブルテレビジョン

盛岡市のシンボル（市の花・市の木・市の鳥）



盛岡市の花『カキツバタ』

さわやかな初夏（6月中旬頃）に紫色の花を咲かせます。古くから市内の各地に自生しており、山岸に群生しているカキツバタは、県の天然記念物に指定されています。アヤメ科。多年草。



盛岡市の木『カツラ』

山地に自生する落葉樹で、高さ30メートル近い大木となります。枝が垂れる「シダレカツラ」はこの地方特有の変種で、肴町と大々生の瀧源寺、門のシダレカツラは国の天然記念物に指定されています。カツラ科。



盛岡市の鳥『セキレイ』

市街地を流れる中津川周辺などでよく見られる濃淡のコントラストが美しい鳥です。オスとメスの仲がよく水をたたくように尾を上下させて飛ぶ姿は、とてもスマートです。セキレイ科。
